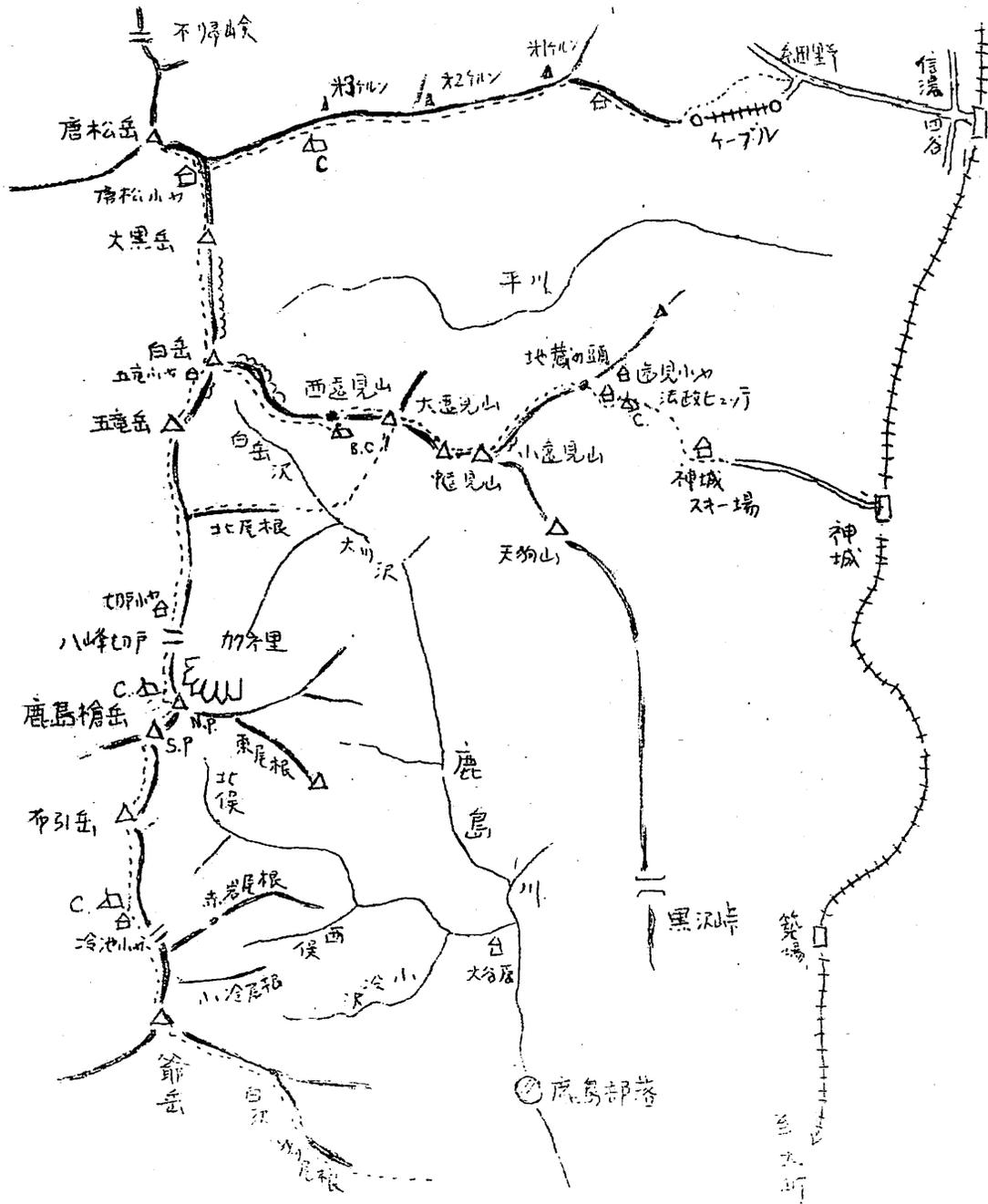


1965年

冬山合宿報告書

信州大学山岳会
伊那松本山岳部

概念図



後立山 唐松—爺岳

合宿反省

はじめに

C.L. 小川 勝

今回の冬山合宿は、遠見尾根より鹿島槍
方尾根への縦走と、五竜岳の北尾根 attack という
比較的ポピラーなルートをとった。このため
年生よりも上級生の方に、安易感があったように思
われる。しかし、実際には、雪庇を踏み破ったり
もとから新雪雪崩を引き起したりで、遭難一歩
前の状態であった。全く冷汗ものである。
トファインディングの甘さを示す以外の何物でもない。
今一つ感じたのは、全員の合宿前のトレーニング
不足である。積雪期の山行においては各自が
全に他人に迷惑かけることなしに行動でき
なければならないという自明の真理を忘れて
いる人もいた。今迄の部生活で何を学んだ
か疑いたくなるような言動があったのは残念で
った。今後のリーダー会はより厳しい合宿
加資格の検討が必要となると思う。
ともかく我々は、今度の合宿で多くのものを学
んだ。今後は、これを生かした山行を計画しなけ
ばならない。前進！前進！又前進！

各係及參加者名簿

| 各係 | 氏名 | 部歴 | 学部 | 科 | 学年 |
|---------|-------|----|----|----|-----|
| C.L | 小川 勝 | 4 | 文理 | 英文 | II |
| S.L | 岡村 知彦 | 4 | 教育 | 体育 | IV |
| | 川治 晴彦 | 5 | 農 | 農学 | IV |
| | 西阪 孚 | 4 | 農 | 畜産 | III |
| Manager | 中村 洋 | 3 | 農 | 林学 | III |
| | 福原 正昭 | 3 | 農 | 畜産 | II |
| 裝備 | 井上 紀樹 | 2 | 医学 | 進学 | II |
| 食糧 | 牧 晃一 | 2 | 農 | 林学 | II |
| 食糧 | 扇 能 清 | 1 | 農 | 農学 | I |
| 食糧 | 小林 幹夫 | 1 | 農 | 畜産 | I |
| 气象 | 内藤 精二 | 1 | 農 | 森林 | I |
| 医療 | 佐藤 俊彦 | 1 | 農 | 森林 | I |
| 記録會計 | 村田 讓治 | 1 | 農 | 森林 | I |

残留部員

| 氏名 | 部歴 | 学部 | 科 | 年 | 氏名 | 部歴 | 学部 | 科 | 年 |
|-------|----|----|---|---|-------|----|----|---|---|
| 西郡 光昭 | 6 | 医 | 専 | 3 | 出島 五郎 | 6 | 農 | 林 | 4 |
| 新 幸英 | 6 | 農 | 林 | 4 | 真野 孝一 | 5 | 農 | 畜 | 4 |
| 平 邦彦 | 5 | 農 | 畜 | 3 | 田中 正治 | 5 | 農 | 林 | 4 |
| 宮崎 敏孝 | 4 | 農 | 林 | 4 | 新谷 剛 | 4 | 医 | 専 | 1 |
| 中邨 康文 | 4 | 文 | 文 | 4 | 小出 元 | 1 | 農 | 林 | 1 |
| 金子 鉄男 | 1 | 工 | 工 | 1 | 木下 盛引 | 1 | 農 | 林 | 1 |
| 山田 正引 | 1 | 工 | 工 | 1 | 古川 三郎 | 1 | 工 | 精 | 1 |

合宿期間 昭和40年12月20日 — 同年12月30日

行動表

- 12.20 入山初日 松本 ~~-----~~ 神城 — 遠見小屋 T.S.
- 12.21 2日 — 西遠見池付近 B.C 設営
- 12.22 3日 — 五竜岳 アタック — etc
一般 route より L. 岡村 西阪 川治 枝内藤
小林 佐藤 扇能 村田
北尾根判 L. 小川 中村 福原 井上
- 12.23 4日 }
12.24 5日 } B.C にて 沈殿
12.25 6日 }
- 12.26 7日 } 校区用事の為下山 一年生途中逢ラハル訓練
- 12.27 8日 { A — 唐松岳 — 八方池 T.S.
L. 小川 西阪 川治 井上 内藤 佐藤 小林 扇能 村田
B — 五竜岳 — 鹿島槍北峰下
L. 岡村 中村 福原
- 12.28 9日 { A — 八方尾根 — 細野 — 信濃四ッ谷 ~~-----~~ 松本
B — 沈殿
- 12.29 10日 { A 松本部室にて meeting 後 7m. 11:30 解散
B — 鹿島槍岳 — 冷池小屋
- 12.30 11日 B — 爺岳 — 白沢天狗尾根 — 鹿島部落 — 大町 ~~-----~~ 松本

A は 一年生 主体 party (八方隊)
B は 上級生 party (鹿島隊)

行動記録

12月20日 入山1日

松本 ~~+++~~ 神城発 8.30 — 冬道入口 9.45-9.55 — 昼食 10.05~10.25
3休 11.15 — 4休 12.30 — 遠見小屋着 13.35

電車の窓の景色が大町に近づくにつれて、松本では雨であつたのが雪に変わり真白な銀世界になってくる。やはり山間部だなあと考えた。雪を見るとむしろスキーをやりたくなる。神城駅を降りると小雪がパラついていて、みぞれである。取付から小一時間程したらラッセルのトレースがついていた。我々より1~2日前に入山をしたらしい。〔ラッセルの練習にはならないが心の中では、ほとした。〕しかしラッセルをほとんどしないのに、なんとつかれたことだ。約五時間程かかって目的地へ到着する。

!! なんとこの感劇だろう!! [佐藤記]

12月21日

Weather ① ガス発生多

起床 4.00 — 遠見小屋下 5 発 7.20 — 休 ^{8.10}/_{8.30} — 昼食 9.15 —
小遠見 10.15-35 — 大遠見下 12.30~50 — 西遠見池下 13.55

昨日同様の苦しい行動であった。(しかし皆良く頑張った。時折見える鹿島槍岳の雄姿が唯一のなぐさめであった。西遠見のテシ場は五竜岳、鹿島槍のすばらしく良く見える所で、気持良い。

山はバテない限り楽しいものである。[村田記]

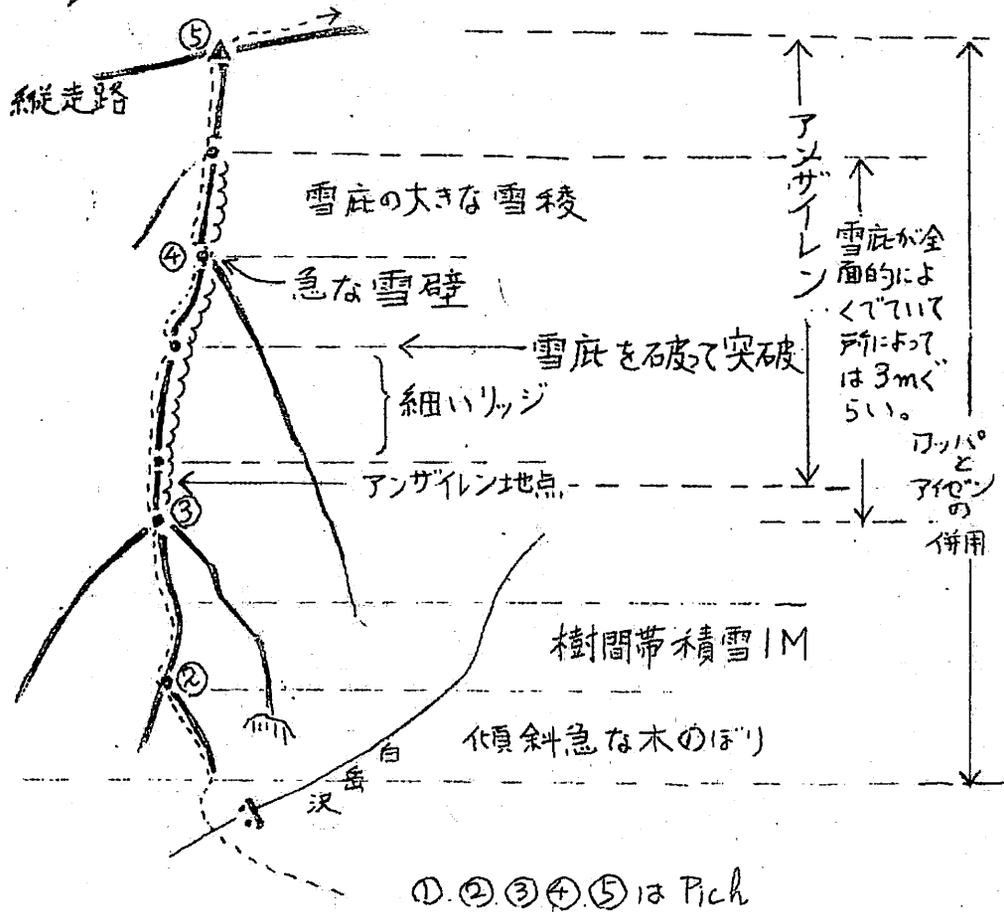
12月22日 (合宿3日目) Weather. ○夜◎

Even Getup 3.00 他 4.30に3起床

五竜岳へ北尾根 attack 隊

Member L. 小川 中村 福原 井上

出発 5.45 — テント場尾根休 $\frac{7.00}{7.15}$ — 白岳沢トラバース北尾根取付 $\frac{7.50}{8.00}$
 北尾根休 $\frac{8.45}{9.05}$ $\frac{10.15}{10.35}$ — anseilen 11.10 — 休 $\frac{14.45}{15.00}$ — 縦走路 $\frac{17.40}{17.50}$
 休 $\frac{19.45}{19.50}$ — 五竜岳 $\frac{21.40}{21.50}$ — B.C 23.35
 anseilen 小川 — 井上, 福原 — 中村
 (ルート図)



感想

西遠見下より懐電を灯して、昨日のトレースを伝って大遠見岳へ下り、テント場尾根を降りる。雪状表面5cmのクラストで、その下は嵩の雪。アイゼンとワッパの併用で足が重い。白岳沢のナダレにおびやかされてトラバース。白岳沢の滝は少々水が出ている。取付きから200M余り急な樹間帯で木を堀り出して「ホールド」とし、おぼ登る。ジャンクションで Essen パンを食う。

2Pick目快適な雪稜。ジャンクションにて休息、ヨウカンに舌つつみと打つ。ここから雪底の張り出しが北側に1m~3m出ている。ラッセル20~30cm。細いリッジで南側北側に切れている所80mは、スタックでザイル80mをのぼす。その後の40mは横まき不可能なのでリッジ通いに雪底を突き破って突破。120mのぼしてカンバ帯にて2席目の Essen。この頃から全員疲労が増す。

4Pick目20mの雪壁に始まりジャンクションに立つ。後200mの雪稜。最後の10mのぼり松帯の直登を過ぎて60mの雪稜で縦走路のジャンクションに出る。ここが終了点である。ここからヘッドランプを出して帰幕の途に入る。五竜岳迄の稜線はアイゼンを馬鹿使い、又何度かルートを間違えて五竜 Peak に立つ。別動隊の旗をここに見つけ、そのトレースを伝って下る。白岳下にて出迎え Party に出合い、帰幕す。

[中村 洋記]

コースタイム

B.C 出発 6.45 — 白岳 peak 通過 7.55 — 五竜小屋 8.03 —
五竜 peak 10.35 ~ 10.55 (昼食) — 五竜小屋 13.15 ~ 13.45
B.C 着 14.30

朝 3 時に起こされて 半分ネボケながら朝食を食べた。
Smooth に用意ができたと思ったのに 意外と時間を
食っていたのには意外だった。 もう一つ意外だったのは
1 日中バッチリ晴れていたこと。 全員顔が真赤に
なったり昇天した。 アイゼンとワッパを併用して
何かグットきましたネ! アイゼンで五竜 peak へ向
て急斜面 ぐれもガレまじりの所で、ヒーヒー いった。
恐ろしくて冷汗。 暑くて汗。 おかけて 大分汗を
かいた日でした。 デモ 晴れて大パノラマが見えた
ので 幸せデモンシダ。 (内藤 記)

12月23日 [合宿3日目] 沈澱 Weather ⊕

昨日来の好天も今日は、あれ沈澱; 朝ゆくりと
起き、初日より3日ぶりにのんびりと過ごす。

まず起きてラッセル。他にも2~3人。先輩から沈澱
の時のラッセルはたいへんいやなものだと聞いていた
が、どうも感じなかった。(しかし、午後になり外が薄暗
くなって来たら、その味があるほどどうなづけた。

昨日の北尾根アタック隊の帰りがおくれた為、答良く
眠っていた。Essen は朝昼、で予定外のものを使い
何がどれだけあり、何をどれ程使ったか、全然 →

⇒あからずこの先どうなるのか少し心配であった。
今日一日は遅く起き、朝、昼、晩と食べ続けた。
〔扇能 記〕

12月24日 沈没 Weather ⊗U⊕

4時半に目が覚めた。沈没だ。今日の
Essen 当番の誰か曰く、「またチャパティか!」。
10時半に3めしダシコラーン。ガバチョ食べて
いると川治氏曰く、何か雨が降る中で、ベチョベチョ、
グチョグチョ……。この発言は当然もめられるべく
doom 付けられていたのだ。裁判官 Don Makoa 氏。
書記官 小川氏。中村検事。T.D. ハーلم
弁護士。被告 川治晴彦、福原正昭。
陪審員 5人多 参考人 信大病院 Dr. 牧
約一時間の裁判の後、被告川治氏には
30分の宮倉。執行猶予。1時間1時的。
3らあ者 福原氏には 29分30秒の宮倉。
執行猶予1時間の sentence が下った。
そして チャパティ……。〔小林 記〕



12月25日 [沈澱3日目] Weather ⊗ ⊕

Essen 当番に当たっていたので四時に起床し外を見た。外は風は強くなかったが雪がふっていたので沈澱することになった。又例によって九時ころ起きてからズーと Essen 作りに精を出した。後はヒマをつぶす為^に歌を歌い、又学会と称して楽しい話をし、笑い合った。クリスマスの日我々だけの楽しみカタライであった。Essen 作りのあい間、テントの周りのラッセルをしたが、掘れども掘れども、降ってくる雪に又すぐ埋まりやまりした。明日晴天であったなら、白岳迄のラッセルは腰ぐらゐまで埋まるのではないかと思ひ浮かべてケツソリする。

吹雪はいやだ。 [村田 記]

12月25日 合宿7日目 沈澱 Weather ⊗ ⊕

今日とは思っていた日がまたもや沈澱。昨日の揚子江下流の1031mbのHもどこえやら、代ってLが、日本海に発生し全員の期待もむなし、先の見違しもつかず、からくり、牧さん、27日より信毎のアルバイトの為下山、その見送りを兼ね、大遠見迄ラッセル、S.N.A.Cのラントまで行き少しだべてきた。下るときB.Cから10分も行くと、ラッセルの穴があったが、その傍をグイグイ下る。途中、法政大 party と行き違い、我ラントの付近に近づいてラントを張る。天候の不規則のため

⇒等で 石油の使済量が予定よりオーバー
して、我、片膝チン Den Mako 5は頭を痛めて
いる。もうオ日目目の沈澱の時と違い、飽き
飽きし、不自然な姿勢でいるので体のあち
こちが痛み、もうたくさん。テントの周りのラッ
セルもオ日目は はりきっていたが、今ではもう
横着になって来たようだ。テント内もオーバ
ージュズについての雪で入口付近は真白、他の
所もゴチャゴチャ。アー！沈はイマダ！
4日前と比べ積雪量は、1日30cm以上も増し
テントも雪の中に埋まり、行って、せかくほうり出
した雪も一吹き風の風で再びもどる（まつ、初
めの内の明るい雰囲気も暗くなって来たようだ。

扇能 記

12月27日 合宿8日目 Weather ○

今日よりハ方隊と鹿島隊に別れた。

A. ハ方隊、コースタイム。起床4.30 - 出発8.05 -
白岳 peak 9.15~35 - 昼食11.30~50 - 唐松小屋^{13.05}13.15 -
唐松岳 13.35~50 - 唐松小屋 14.05~15 -
オケルン（ハ方池下S）14.35着。

感想、荷は軽くなっていて、アル程度トレースが
あるので、楽しいかと思つた。-----。

アイゼンを着けて歩くと気を使うし、ヒッカケや
はないかとビクビクする。 ⇒次Page へ。

⇒ でも疲れてくると気をつけなくなる。大分ガニ股を注意されたし、ツアックをひきつっていると注意された。 イヤー まだまだトレーニングをしなければ... と思いました。 <内藤 記>

鹿島隊(コースタイム 感想) 紀行文

4時起床。5日ぶりの快晴に全員飛び出して徹夜にかかる。薄暗闇での立喰いの食事モロモロ、早寝と忙しく遅れる。隣に幕営の法大の人達サブで五竜岳往復へと出発し、深いラッセルに悩まされているのが見える。

8時出発。アゼンとワッパを併用し中本村をトップに西遠見を後にする。9時35分、白岳でワッパをとり八方尾根下山隊と別れる。

3人残り[井上 attackの際背を痛め八方隊にかわる]彼等を見送り。五竜 鹿島を見ると何とも云えぬ感慨がわく。11時10~25分五竜 Peak。昼食のパン。鹿島北壁の剣。続く北方稜線の長大さと、四方はあばらしい眺め。Peakからモトレスがあり、それを利用する。トレスはほぼ夏道どおりであった。(先日の北尾根 attack後の帰途は闇の中とんでもないところを通ったものと話し合う。) カクネ里の方で不気味な雪崩の音が聞える。福原の調子悪く 時間が掛ったが事なく七戸までくる。しかし夕暮れた。

→ 次 Page へ

→5時30分切戸通過。切戸はアップサヤ
(支点は這松に2本のシュリンケがあり、切戸は
する。) 通過後日没で今合宿2度目の
行動となる。2 Pick を中村、福原、アンサーに
カットする。先行 Party の声が聞える。先行
は稜線に上った所でビバーク。ここから一歩
なかり稜線をいいにルートをとる。20時5分
北峰下。夏道大トラバースに入る少し手前の所に
テントが張れるおろかのスペース有り。雪底と
風に強意(設営、完了20時50分、全員
テントに入ってから風が出て強くなる。21時
夜食のマカロニで腹が満ち就寝。風が強
テントはなるが寝れてよく寝入る。

<福原 記>

12月28日

Weather ①→②→③

A 八方隊 [下山]

八方池 7.50 — 免平 9.10 — 咲花ゲレンデ 10.35 (昼食)
四ッ谷馬 12.00 [起床 5.00]

低気圧の影響で天気はくずれるはずなのに、八方
尾根までは快晴まではゆかないがよい天気
めぐまれ快適な下山日和りであった。
(かし鹿島木倉の方では山ガスがかかっている
よい天気とは云えないだろう。

早朝迄吹いていた風も吹止み、細野部落
が眼下に我々の下山を招き迎えているように
はっきり見える。 ⇒ 次 Page へ

⇒ 皆の体の調子はすこぶるよい。下山ともなると、
今迄調子の悪かったラジウスまでも今日はばかに
調子よく燃えている。下へ下ることにスキーヤーが
ふえてきて下界が近すいてきたことを矢口させる。
細野へ降りて山を見るとガスがかかっている。何か
わびしい気がすると同時に無事下山の喜びを皆ん
なでかみしめた。 (佐藤 記)

鹿島隊 沈澱

朝。Essenを済まし出発待機。風が弱まるの
を待ったが 昼頃風雪となる。 沈澱。

稜線上のこの小さなテントは風ではたたく。
三人だけの静かな沈澱。西遠見で覚えた
歌の復習や、岡村氏の楽し又悲しい想い出
を聞く。 聞くも涙

笑うも涙 (福原 記)

12月29日 合宿10日目

B鹿島隊

起床 4:00 強風 ⊗

撤収 8:00 - 9:00 ⊕

出発 9:15 — N.P 北 400m 10:50 — N.P 直下 40m 11:50

— N.P 13:15 — S.P 15:05 — 冷小屋 16:00

設営完了 17:00 ⊙ 強風 ⊗

就寝 21:15

吹雪の中で夜が明ける。天気回復を待つ。 ⇒ 次Pageへ

⇒ 8:00 ガスがうすくなり、1000m 南方の鹿島槍 不峰見ゆ、撤収。
9:15 T.S を後にす。トレス全くなり信州側へ4m 余りの雪庇。昨夜
の降雪30cm。固まってあらず雪状不安定でトラバースに神経を使う。
N.P. 400m 北方。リッジより30m 下黒部側のトラバース 福原足
下より新雪表層雪崩発生。中およそ200m 終着点確認出来ず。こより
中村、福原 アンサイル。完全リッジ 通しにルートを取る。N.P. 直下40m
(夏道のN.P. トラバース 中尾根へ出るルートは雪状悪く不可能) リッジ
通しに直登。中村登攀後 サイルを降し岡村、福原が組む。13:15
北峰 P. Essen. サイルをまく。ガスの切れ目に陽がさす。風強し。
長野山岳部、attack 隊 秋山、佐藤と会う。天狗尾根からのトレス
が N.P. 途一つ。再び小雪。15:05 SP 16:05 冷水屋前を T.S
とす。中村記。

12月30日 合宿11日目

B 鹿島隊 下山

起床 4:50

Essen 6:45

出発 8:05 — 箭ヶ岳 N.P. 9:05 — 東尾根白沢天狗尾根分岐

10:00 ⊗ — 1766.9m ジャンクション 付近 11:10 ⊗ — 鹿島部落

12:35 ⊗ — 松本着 15:50

時計が止って寝過ぎ。4:50 起床 天気晴。

8:05 出発。トレス有り。9:05 箭ヶ岳 N.P. を通過 下山ルートに入る。

雪が降り始めガスが濃くなる。白沢天狗尾根の方向はトレス無し。

東尾根は完全なトレスがあって小沢直に足が進む。11:10 1766m

ジャンクション 付近にて Essen 粉雪小降りが たんたんの湿雪にかわる。

東南にのびる尾根を鹿島部落へ下山す。 (中村記)

糸反省

Essen.

- 縦走隊の行動か食一日分が抜けていた事実は、如何なる言訳をもってしても弁解される余地はない。事前に気付いたから良かったものの、そのまま見過したら いかなる事態になったかを想像するだけでも いやになる。「遭難は絶対だすまじ」という大前提の裏にこのようなミスがあるというのは、またまた遭難というものに対する考察がたらないのではなからうか。Essen係として深く反省する点である。

今回は、一年生を中心に Essen 計画を立ててもらったが上記のミスをのぞいては良くかんばつてもらったと思うが上記のミスがあった以上は、もともともなくなるというものだ。いかなる係といえど細心の注意が必要である。 (牧記)

- 食料係として、縦走隊にもう少し砂糖等をたくさん西己分すればよかったと思います。それからリーダーに指摘された通り、前の晩に次の朝の Essen 用の水を作っておかなかったのはズク無したったようです。合宿の前の数週間に乾燥野菜を作ってみました。キャベツ等は一枚一枚はらばらにはがし針金でつるし玉ねぎは料理用に切り、白菜は、はらばらにして新聞紙めよにのせておきました。24日間くらいで、キャベツ、玉ねぎ、白菜共に殆どの重さになりました。けっこう食べられるようです。乾燥野菜の利用価値は十分にあるようです。

私は全般的に言って、客観的にみたら、今度の Essen 計画は、ほぼ成功だったと思っています。しみじみとした満足感を味わうことが出来ます。しかし、それと同時にそれをうちくたいてしまうのは、今度の Essen 計画の Essen 計画は、完全な、コミュニケーシ

ヨンの欠陥による失敗であり、9ヶ月にもなろうとしているのに、それが建設的か否かは別として「部」というものの本質的なふん囲気を感じることができなかった自分自身に対しての敗北であるという考えです。

もっと学ぼう、もっと謙虚に、さらに逆境的ではあるがもっとも自分を大切にしよう。

小林

- 冬山ということでは、今までの夏・秋・その他数多くの山行とは異なったいろいろなまじしい条件の下での行動であるので、Ezumi係としても何かユニークな充実したものにしなければと考えてはいたが、いざ具体的に計画となると、いったい冬山とはどのようなものか、上級生の人達に聞いてもピンと来ず、又食料に関する本などを読んで、我々のEzumi費とかけはなれているので、量、品目をみてもただうらやましいと思うだけでたいした参考にもならなかった。

結局、初めての雪山でわからないので、従来どおりの合宿にならうことになった。

毎度のことながら、今合宿もまた整理の裏手から、材料の所在、残量がはっきりせず、食事のために各ダンボールをかきまわしEzumi係より他の人の方がくわしい有様で、せまりテント内をよりせまくして申しわけなく思う。しかし今後の方法といわねども、ちょっと考えつかない。

少くでもましにするため、ダンボールを、こわすないうように、各自注意してもらいたい。(ex. 背にあたり汗でぬれないようなところにはビニールシートをあてる)

どうにか「冬山合宿、食料係」を終え、この次はもう少しぐらいはうまく出来るかと考えている。

1966.1 扇能

献立表

| | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
|---|----------------|----------------|-------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-------------------|-------------------|----------------|----------------|
| 朝 | めし み汁 納豆 | み汁 み汁 み汁 | カレー カレー カレー | たに たに たに | 夕飯 夕飯 夕飯 | み汁 み汁 み汁 | 雑煮 雑煮 雑煮 | カレー カレー カレー | カレー カレー カレー | み汁 み汁 み汁 | たに たに たに |
| 昼 | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン | パン パン パン |
| 晩 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 | み汁 み汁 み汁 |

反省

Manager

伊那部員の登攀意欲の抑揚と団結をうながし、宮崎4-Fと小川リーダーとの連絡を主たる仕事と考えましたが、先の内題は達成出来ませんでした。具体的にトレーニング係の仕事の充実、meetingあるいは個人的な山の研究等ですがどれを取っても満足たるものはなく残念であります。今迄クラブの中に悪い一面として持っていた慣れあいが互をあまりかき合ったためか山に対する個々の考えがクラブの中での団結を強めあう要素に乏しいのか、いずれにせよ不安定な結末であった様に見えます。

連絡面、個人で出来かおる場合も上級生のようにback upを得ることが出来ず、事無きを得心よかったと思っております。 中村 記

気象

1 気象 card について

「記入事項が多かった」

「いいこと言った人もいたが自分としては多かたと思っていたい。気象カードの記入のことを考えるとあれくらいの項目が出て来た。

① 記入時刻が多かった。

朝6時の記入時刻は 沈黙の時などは写すまで記入した人はいなかった。記入時刻は次回に於いてはある程度の幅をもたせるべきであろう。

II. 天気図作成について

① 練習不足のため 基本等圧系の読み上げを図示できなくて脇に書いたりなんかしてしまい-----

② 入山前一週間の天気図を作成してあったこと。

III 気象係をやって感じたこと。

天気図は どうやら書けるが、さてそれからの天候判断となると全然ためという----- 俺の如き、気象係は全くためである。

部の内に 常任気象係という様なものを作り、2年生を大将にして1年数人で気象グループを作り、その任にあたらう..... という Don Makeの意見には全面的に賛成である。

今回の合宿中、天候変化などに気を配っていたが、カスるこゝろがあると思うと、カスが晴れてゆく..... という様な変化にはどんな意味があるのかなあ..... などと思い始めた。気象の変化は微妙であることも分かった。

天気図による大局的判断と 観天望気による現況把握が大切なことも分かった。本年は気象のことを多少なりとも勉強して今回の合宿に対する反省をしたい。

昭和41年 元旦

装備係

井上 紀樹

今回の合宿では 次の事を最初に計画していた。

- 1) 西遠見でB.C.を設営してから定着形式になるので、居住を快適にしたい。
- 2) 石油の消費量を研究してみ、他部の計算法との差を出してみたい。

以上の二つの事項について反省したい。

1の方、準備の出発が遅く、テント類、トランシーバー等を計画通りに出来ず一部の人にはかなり不快な居住にしてしまい、attackの時には要らぬ心配をかけてしまった。大いに反省すべき点がある。

2の方、合宿の中盤頃迄は消費量がずっと多く、遂には天気が悪かた5、計画を変更しなければならないかと言うところまで追いつめられた。最初の6日間で、1人1日170ccの所を230cc消費していたのである。だが、この最初の18日の消費を他部の計算法で行くと、毎日500ccずつ6台に入れ替えているとの量になる。即ち、毎日1回ずつ入れ替えている事になる。よって、我々の計算法の方がずっと少い量でめれるとの結論に達した。しかし、人員数の多少、日数の多少によつては、これも変わるだろう。かくも多量に石油を消費(差)した原因はと考えると、attackの日、次の日の打ち上げに数時間余分に使用していたと言う事がある。がしかしそれよりラジウスの使用法の雑さ、ラジウスの不完全燃焼が主な原因となり得るだろう。一年生のラジウスの扱いの雑さは、上級部員、特に二年生の注意の仕方が悪いと思う。

ラジウスの不完全燃焼については、合宿前に入念な点検を行なったにもかかわらず、ガスもれや、熱効率の悪さ等が現われた。その為炊事にかなりの時間がかかってしまった。これについては、石油が悪いのか、或いはラジウスが悪いかの二つの理由が考えられる。石油を入れる時に、一緒に降雪が入って、つまたりづかかもしれない。だがこの割合はほんの少しだろう。次に、ラジウス本来は、石油を使用するものであるが、熱効率が良いとの理由で $\frac{1}{2}$ のガソリンを混合しているのである。ここに原因があるのだろうか、しかし、それなら今迄に何度も使用しているのに、去年の春山以外は、殆んど支障は現われなかった。

ラジウス本体の故障は考えられないだろうか。ノズルの口が大きくなっている。これにより余分なガスが出て（特にガソリンは揮発性が強いので）、不完全燃焼の様な事になり、かつ石油の消費量が多くなったのではないだろうか！ まだ正確な結論は出せないが、私個人としては、最後の理由によるものではないかと考えて、ノズル交換等の対策を行い調子を調べて見るつもりである。

いつも行なっているのであるが、今回も伊那への連絡が遅く、中村氏を大分慌てさせてしまい申し訳ないと思います。

今合宿使用装備品 List

A = 八方尾根下山隊 B = 鹿島槍隊

| 設営用具 | A | B | 登攀用具 | A | B |
|--------------------|------|---------|-----------------|-----|----|
| テント一式 | | | ザイル・ナイロン | | |
| S.A.C No. 32 (五人用) | 1 | 1 | テロフ | 1 | 2 |
| 2) | 1 | (7-8人用) | ハンマー | 2 | 2 |
| ツェルト | 1 | (2-3人用) | ハーケン { 大 小 } | 2 | 3 |
| 雪用スコップ | 1 | 1 | カラビナ | 2 | 3 |
| ナタ | 1 | 1 | シュリング | 2 | 4 |
| ノコギリ (Essen 兼) | | 1 | 火器 | | |
| Essen 用具 | | | ラジウス | 4 | 2 |
| ナベ (大) | 1 | | ケイネン (大) | 1 | 1 |
| (小) | 1 | | 石油 | 25ℓ | 3ℓ |
| コップ (大) | | 2 | 石油用ホリタン | 11 | 1 |
| ナベブタ | 2 | 2 | ローソク (50本) | 12 | 1 |
| ヤカン (大) | 1 | | その他 | | |
| (小) | | 1 | トランプ (5枚) | | 1 |
| 食器 | | | 温度計 (最高最低) | | 1 |
| ハシ | 13人分 | 4人分 | 目覚し時計 | | 1 |
| 包丁 | 1 | 1 | ブラシ | 2 | 1 |
| オタマ | 1 | 1 | 雑布 | 1 | 1 |
| シモジ | 1 | 1 | 針 金 | 5m | 3m |
| 茶 コシ | | 1 | 赤 布 | 少々 | 少々 |
| カンキリ | 1 | 1 | 細 引 (5m) | 2 | 2 |
| ホリタン 水用 | | | | | |

今合宿の医療計画にあたって

佐藤 俊彦

今回の冬山の医療に当てますとまどったのが
医薬品の数量であった。でもO.B.やら先輩やらに
色々教えてもらいながら、どうにか一応揃えた
つもりでしたが、入山してから、あれがない、これがない
と、色々迷惑をかけてしまった。それに入山前に
自分では準備完了と安心していたが、事前の
連絡を怠った為、入用の薬品が入らなくなって
大変迷惑をかけてしまったことは、誠に申し訳ないと
感じております。しかし今回自分に課せられた
この重要な任務を機会により一層の研究心と
努力を持って、すべての事に当ると思っております。

以上

待参薬品は計画書と見てね

Memo.

会計係より

村田 讓治

合宿直前に会計係であった古川君が足に負傷して、参加できなくなったので、合宿中の会計係が僕のところに回ってきた。性急なことで始めはあわてかされて金の出し入れがうまくゆかず、何にどう使ったか良くわからなかった。しかしまあ何とか合宿後カタを付け、今日に至ってある次第である。年の瀬でもあり、合宿費はうまく集まらないのではないかと思っていたが、以外とそうでなく、年内に一応払いの方は済んでしまいうれしく思う。今後ともうまくゆくことを期待する。以下は今合宿収支報告である。

| 収入の部 | 内 訳 | 収入 | 支出 | 残金 |
|--------|-------------------------------|-------|-------|-------|
| 合宿費 | 2550×11 + 1500×1 1000×1 | 30550 | | 30550 |
| さし入れ | | 1400 | | 31950 |
| 支出の部 | | | | |
| 交通費 | 150×13 | | 2080 | |
| 装備費 | (ローソク、白ガソリン、 灯油、磁石) | | 2095 | |
| Essen費 | | | 25840 | |
| 修正パン屋 | 5748 | | | |
| 米 | 650 | | | |
| 米 | 1782 | | | |
| 米 | 135 | | | |
| アカサシ | 18525 | | | |
| さし入れから | | | 900 | 35 |
| 総計 | | 31950 | 31915 | 35 |

合宿費未納入者後3人(2550×1 + 1550×1 + 1050×1) 4150円入る07
これより古川君の合宿費をかえす。残りはアルバム、報告書等に使う予定
以上

「ズク」について

S.L 岡村 矢口彦

信州には便利な方言がたくさんある。「ミミル」「マル」「ズク」「オソイ」等々あるが、これらの方言中で、最も使用価値の多い言葉は「ズク」の一言につきるだろう。松本、佐久、善光寺平に及ぶ広大な地域にこの言葉は用いられているが、標準語に訳すれば何とすれば「良い」のだろう。精手数、根気等とすべきだろうか。いや、やはりこれはズクと云い表すのが一番ぴったりしているようだ。

夏山や秋山では、このズクを出しおしんでも、その山行に大きな欠点は見い出せぬが、積雪期においては、それを少しでもなおざりにする事は出来ない。

身体は着ぶくれしていて活動性が鈍くなる上に狭いウエハーの中で全ての物事が行なわれる。外に出れば着ぶくれの上にさらに着ぶくれを重ね行動せねばならない。このような状態で吹雪の中を進むことを考えれば、すくをおしんでズクを出さねばならないのは当然の事であろう。

一年の諸君は冬山を前にして上級生から驚かされ、相当の覚悟をしていたであろうが、それだけの事を充分に感じたであろう。

しかし、遠見やハ方のそれが全と思わずに、意気向上してほしいもの。二・三年生の上級生は昨年あるいは一昨年の山行を通じて、テントワークを体得して来たであろうに、それらの事が今山行では全然生かされていない事、充分に反省せねばならない。ことに三年部員は、全員中で最もズクを出して働き一年の模範と成ってくれる事を希望したい。自分達はただ名と胃袋だけが働いてはいらなかつたか。これも又充分反省してもらいたい。

上級生の入山前のトレーニングに関して、上級生だから、簡単な山だから、興味のない山だからと云う理由でそれをなおざりにしてほしくない。山が我々に示す厳しさは上級生にのみならず、遠見尾根であつても

あと10分おそく入山していただなら、丸一日かかって西遠見から白岳
に登るのが精一杯なほど、冬山は千変万化する事をも。

ラッセル、ワカン、アイゼンワーク等は直接体得してゆくものだから
色々言わぬとしても、積雪期の登山においての行重さは体当りして
もまたまたたりぬものだから、ズクを惜しまず下山して小毎の残堀
様な山行を一つでもしたいもの。

こう考えてみると「ズク」と云うことは「歩」は「部員をしごく」の一番
便利なことばの様な。こんなことばは方言の中でそうザラにお目
にかかれるものではない。

何はともあれ全員無事下山出来た事を最上の喜びとしたい。

冬山合宿 雑感

佐藤 俊彦

一口にいつて今合宿は皆んなで楽しく冬山を過ご
したと言えるでしょう。(かし入山前はこの計画に
対してと言うより)この冬山自体に対して春山しか
経験していない自分は、不安と言うのが先にたっ
てなかなか自分の心がまえがつかなく、いざ
入山してしまうと、不安がズクに変わり不安はふっ
とんでしまった。それでもやはり22日の北尾根
ブタック隊のことは、あこく心配でならなかった。
今後この様なことは起こらないと思うが……。それに
停滞 四日間も続くと色々といらぬ心配をするもの
であるが、やはり数多くいると心がほぐれ、皆んな
がうまくいくものであると矢口った。

今回は案外天候に恵まれて比較的良い山行が出来たことは、冬山のすばらしさというものが、我々一年生の目に焼きつき、今後冬山につかれさせることであろう。とにかく自分としては、一生懸命にやり、又、よりよき山行であったと最後につけ加えておきたい。

一筆啓上つかまつり候 井上 紀樹

今回の合宿に気のついた事を、トレーニング係として一言申し上げたい。秋山合宿の反省に於て、私も含めて、各人それぞれトレーニングの必要性を痛感し、且つゼミナールの席に於いても、それぞれ意見を述べ、又、人の意見を聞いて、トレーニングと云う物を再認識したと思う。しかし「それにとかかわらず」トレーニングにも余り顔を出さず、何をしているのか分らない様な者がいたように見受けられる。そんな結果は、今回の合宿で「ありあり」と表われた。この事は、一年生に限らず、上級生にも、それ以上に体の不調等によって見受けられる。普段トレーニングを規則的に行っていれば、いかに山の中に入ろうと、そう簡単にかたが来る程、我々の身体は老い込んでいない筈です。各人それぞれ今回の経歴を基にして、一層トレーニングにはげんでいただきたい。

編集後記

今合宿の記録係として

内容の多少、良雑は別として、皆様方の御協力によりここに報告書作製が成ったこと、うれしく思います。又、アルバムの方は、この報告書作製急ぎの為に手がつけてありませんか、この方もネガが集まり次第やりたいと思っています。

後御期待

今思えば、もう思い出の中に入れてしまった冬山合宿。皆様方の心の中に忘れぬ感動として、この報告書が役にたち、又今後の役にたつといたら幸いです。

最後に今年一年が無事である祈り、ここに筆をおきます。

1965年1月22日 J.村田

-冬山合宿報告書-

発行年月日 昭和41年1月22日 Sat.Day
発行者 信州大学山岳会伊那松本山岳部
印刷所 信州大学文理学部
発行所 松本部室
松本市県町信州大学文理学部内

<非売品>